

# DIARIO ITALIANO

## イタリアン・スーパーカー見聞録

取材・文 野口祐子

### ギネスにも登録された 世界最大のガソリン スタンドミュージアム

ミラノ在住のユーコさんと野口祐子女史による、  
イタリアン・スーパーカーにまつわる見聞録。  
彼女の目を通してみたスーパーカーに携わった  
男達の素顔は、生きた資料となるだろう。  
今回は、世界でも珍しいガソリンスタンドの  
ミュージアムを訪れ、ガソリンスタンドの歴史のほか  
こだわりのコレクションを紹介してみたい。



#### MUSEO FISOGNI

文&写真●野口祐子  
text & photos by NOGUCHI Yuko  
協力●ムゼオ・フィゾーニ  
cooperation by MUSEO FISOGNI  
www.museo-fisogni.org

ポンプのメンテナンス事業が  
ミュージアム設立のきっかけに

ミラノからクルマで約1時間、60km  
ほど北に向かったところにトラターテ  
という街がある。そこに、ギネスにも  
登録されているというガソリンスタン  
ドミュージアムが存在する。長年気にな  
ってはいなかったけれど、なかなか行くこ  
とができなかったここに先日やっと訪  
れる機会ができた。

そのミュージアムを主宰するグイ  
ド・フィゾーニ氏は、1941年生まれ。  
家業は家具の製造業が密集する地ブリ  
アンツァで、木材を取り扱う仕事をし  
ていたという。1950年代末になると  
市場はブリアンツァ地方の家具から  
徐々に価格が低いベネト地方へと移行  
して行った。「この先、木材関連の仕  
事はどうなって行くのだろうか？」と

グイド氏の脳裏に不安がよぎった。戦  
後のちょうどその頃、世界中で石油資  
源開発事業が盛んになり、いたるところ  
で油田が発掘され、それに関連する  
事業が雨後の筍のように生まれていた。  
「次は石油関連だ」。グイド氏は家業  
を継がず、将来性がある石油の世界へ  
と方向転換することになる。

1960年、もうすぐ20歳を迎える  
という時、グイド氏が目を付けたのは  
ガソリンスタンドだった。1960  
年代から70年代にかけてイタリアには  
3万5000軒を超えるガソリンスタ  
ンドが存在していたという。彼が選ん  
だ仕事はガソリンポンプのメンテナン  
スから始まった。

その後メンテナンスに伴う関連事業  
も次第に広がった。ガソリンスタンド  
の建設や修復も行うようになり、クラ

イアントは国内だけに留まらず、フラ  
ンス、スペイン、イギリス、アルバニ  
ア、チエコなどへと拡大して行った。

そんな仕事を始めて数年経ったある  
日、彼は偶然、砂採掘場に放置されて  
いたBERGOMI（ベルゴミ）のガ  
ソリンポンプを発見した。それを目の  
当たりにして、「これから古いガソリ  
ンポンプを集め、レストアをして息を  
吹き返そう」という思いが湧いて来た。  
同時にそうしたアイテムを展示する  
ミュージアムも作るかと決意し、その  
日から2000年までの約40年、彼は  
ガソリンポンプをはじめ、ガソリン  
スタンドに関するグッズ——給油ノズル、  
広告看板、缶、オモチャ、おまけ、石  
油会社のオフィシャルグッズ、パブリ  
シティ、プロジェクト資料——などあ  
りあらゆるアイテムを集め、着々と

世界最大のガソリンスタンドワールド  
を構築して行った。

仕事柄、ガソリンスタンドの建て替  
えや閉鎖作業などに駆けつけることが  
多く、そんな現場に行くと、放置され  
ていたり忘れられていたりする昔のア  
イテムがゴロゴロと出てくる。

もちろん、ほとんどが酷い状態だが、  
グイド氏にとっては大事な物。彼はそ  
れらを大切に家に持ち帰った。ミュー  
ジアムを作ろうと決意した日から、社  
内にレストア部門を設置し、本格的に  
稼働を始める。ここに彼の本気度がう  
かがえるではないか。

オリジナル尊重のレストアで  
古いアイテムに息吹を与える

1966年、待望の小さなミュージ  
アムを開設。2000年に会社を閉め

# MUSEO FISOGNI

ガソリンスタンドの歴史や進化が伺える、貴重なコレクションを集めた世界最大のミュージアム



## MUSEO FISOGNI

[ムゼオ・フィゾーニ]

ガソリンスタンドに人生をかけ情熱を持って作り上げたミュージアム

皆に「ガソリンスタンドから見る世の中の移り変わり」を知ってほしい、というムゼオ・フィゾーニを主宰するグイド氏(写真右)。19世紀の半ば、化学者たちは粘度の高い黒い原油を蒸留して「軽い」成分を作り出した。当初の販売形態は液体のままだったが、1885年にアメリカ人のシルヴァヌ・ボウサーがポンプ式システムを開発。その後、灯油、その他の石油製品の需要は広がり、石油製品販売会社が誕生。当時のガス燃料を使う内燃機関は自動車には使用されなかったが、後に液体のガソリンが使えるキャブレターの発明により、自動車にも使用されるようになった。このシステムを用いることにより、カール・ベンツの3輪車はその後のモータリゼーション、そして石油産業発展に貢献した。クルマの数が増えるに従い灯油販売店以外に、ドラッグストア、薬局、大規模商店、公共計量所、鉄道機関庫などでガソリンも売られるようになった。19世紀末にはアメリカでは既に約30もの自動車製造会社と8000台以上の自動車が行き交っていた。その約10年後にヘンリー・フォードは歴史に残るT型フォードを生産し、アメリカでは自動車も庶民の移動手段となっていった。国土が大きく移動距離が長いアメリカでは燃料供給体制の改革もされ、19世紀の終わり頃からガソリンスタンドの重要性が増して行き、20世紀中盤に入ると技術革新による自動化された安全な燃料供給システムの採用が進んでいった。今ではガソリンスタンドは日常生活の重要な基盤要素となっている。アメリカに続き、ヨーロッパ、イタリアでもガソリンスタンドは日常の必要アイテムとなった。時代と共に小さいスタンドは合併、吸収され、規模が大きいスタンドがメインとなっていったが、モビリティを支えるインフラや街の顔としての重要性は変わっていない。その間に、ガソリンポンプ、看板、オイル缶、スタンドのデザインは速いスピードで変化していった。その変遷がここムゼオ・フィゾーニで見られる。

MUSEO FISOGNI  
via Bianchi,25/b-21049 Tradate(VA)-Italy  
+39 3396217531



るまで、レストア部門の職人がガソリンポンプの「再生」に携わり、コレクションを支えて来た。

レストアのポリシーはオリジナルを尊重すること。グイド氏は資料のコレクターでもある。彼の記憶の中にある形や色、そして当時の資料を元にオリジナルの形、色を再現して行った。

当然、技術面でもオリジナル性を重視した。残念ながら会社を閉めてしまった現在、専門のレストア職人はおらず、古いガソリンポンプの専門の知識を持つ者はいない。したがって今は、レストアが必要となった場合、常に自分が職人の横に付いて説明しながらレストア作業を進めて行かなければならないのだという。

「だから時間がかかってしまつて大変なんだ」と語るグイド氏は、一見物静かに見えるけれど、いざガソリンポンプの前に立つと、フツフツと体の中からエネルギーがほとばしる。何の資料も見ずに、古いポンプのストーリーを語り始めるのだ。そう、全てが彼の頭の中に入っているのだ。

ミュージアムでは時間がある限り、訪れる見学者にオーナーであるグイド氏自身が案内役をかって出る。「伝えたい、伝えていかなければならない」という思いがストリートに伝わってくる。それは彼がガソリンスタンドと共に生きて来たという証だろう。だからこそ、「語り」には経緯と愛情がある。このミュージアムはそんなグイド氏の熱い情熱で溢れている。

展示してあるガソリンポンプは1892年のスイス製BREVO(ブレーボ)から始まり1990年までの約180点、その他すべてのアイテムを合わせると5000点以上にも及ぶという。自分の足で集めたコレクションには、魂が感じられるのだ。

世界で最大の貴重な空間ではさまざまなイベントも開催

今から3年ほど前、1700年代の古い屋敷のレストアが完成し、ここにミュージアムを移転した。歴史が感じられる建物の中に置かれている展示物からは、ガソリンポンプが時代と共に進化し、デザインも機能もどんどん変化して行ったことがみて取れる。英国に仕事に行った時に見つけたという、バッキンガム宮殿の近くにあったガソリンスタンドのポンプの先には王冠が付いていた。ムッソリーニ政権時には外国の名前を使用することはできな

かったので、BPが、BP、BENZINA PURAになったという。壁一面に飾ってあるオリジナルの看板の名前やデザインを見るだけでも面白い。オイル缶も時代が感じられる。

昔は、クルマのオイルを間違えて食用に使ってしまった人も多かったという。フィアットの初期のオイル缶のデザインは、手足の先がオイル缶になっていたなんて。当時の広告には未来派の絵画の影響があるようだ。Agip(アジップ)の元が米國 Sinclair(シンクレア)だったことも新発見だったし、ミシランのビバングラム君の種類が多いこと……と、話を始めたらきりが無い。

博物館の2階はパーティー会場になっており、ケータリングを用いてかなり大きいイベントもできる。最近では自動車、バイク関連の発表会のほか、なんと結婚式のパーティーにも利用されること。

「皆、少し変わった歴史ある空間に興味を持つようになった。ここに来ると楽しんでくれるよ。物の形、デザインには必ず、理由がある。実際にここで時代を追って見ていくと、その何故かを知ることができる。そこが大切なんだ。ここを作るにあたってお金がかかっているから、少しは回収しないとね(笑)」といいつつも、見学は無料のもの。凄まじい情熱を持った人が作った、世界最大規模のもの。凄まじいガソリンスタンドミュージアム。コレクションは、グラフィックやデザインの歴史に興味ある方にも必見だろう。オープン日はランダムなので、必ず連絡してから訪れてほしい。詳細はオフィシャルサイトをご覧ください。®